

鯨岡峻著

『両義性の発達心理学』を読んで

浜口 順子

ああ面白かった。鯨岡さんは心理学の人だけど保育のひだひだがよくわかっておられるのだなあ、とというのが、読後の率直な感想。B5判全三七〇ページのやや重厚なこの本だが、ピンク基調のポップな表紙（Nario TAITENさん装丁）の明るさに助けら

れて読み始めてみると、意外と読みやすく引き込まれていった。

『両義性の発達心理学』（ミネルヴァ書房、一九九八年）は、今年の日本保育学会文献賞を受賞した。この本で著者は子どもと養育者の関係に影響を及ぼ

し及ぼされる者——参加観察者——として研究する立場をあえて堅持し、豊富な観察資料を駆使して、保育的關係のひだに隠れたさまざまな問題を「両義性」という視点から提示している。「心理学の人」という言い方はもはや時代錯誤的なのかもしれないが、学際的な広がりを構想せざるをえない保育学界にとつて、この新しい発達心理学は歓迎すべき歩み寄りとして「映った」はずだ。

そう、この「映る・映す」という言葉が、しばらく癖になりそうな予感がある。鯨岡氏は近々「関係発達論序説」の上梓を予定されているということだが、氏の言う「関係」とは向かい合わせに置いた二枚の鏡が「映し合う」イメージに由来していて（メロク・ポンティの使った比喻）、関係の中で示される二者の姿は相手のあり方の「映し返し」であると繰り返し論じられている。私がこの本を「面白い」と思ったのも、私の保育観を映しているからなの

違いない。

この著書は全四章から成り立っている。まず第一章では「両義性の発達心理学を指して」と題して、「両義性」をキーワードに子ども

と養育者の關係のあり方が論じられ、それを踏まえての世代間リサイクル的生涯発達論の素描がある。

「両義性」には幾つかの次元があって、人と人が関わるるときそれが複雑にからみあうことになるが、その中の「根源的両義性」という人間存在の抱える根源的な矛盾についてまず論じられている。これは他者のなかに投げ出されていながら自己に収斂するということ、「緊合希求性」と「自己充実欲求」の間にあるものだ。自他の共軌性とも言われる。もちろんこ



これは子どもの側にも、大人の側にもそれぞれの存在

に内在している両義性である。しかし子どもの場合、乳児期初期には「他から分立した自己をいまだ語り得ないほどに、その自己の輪廓は不明瞭」であるために両義性の双翼は「ほとんど重なり合っている」。乳児期後期から「行動能力の伸長とともに自他のあいだに裂け目が生じ」、自分の「思い通り」が養育者との間ですんなり通らない「捻じれ」を経験するようになるという。「捻じれ」はこれ以後人間関係のなかで繰り返し体験されていく。「捻じれ」という言葉は本書を通じて十数箇所に現れる概念で（索引が便利だ）、欲求が真っ直ぐ実現されず矛盾を体験する状況のことを指しているようだった。そのネガティブな響きとは相対して、捻じれ自体が（適度な強さに働けば）他者との関係性が両義性の間で硬直することを防ぎ、現実の中で動きだすエネルギーの役割を果たしており、自己の発達に不可欠

なものだと理解された。

根源的両義性が人間存在の抽象的なありかたから発しているのに対して、子どもと養育者が共に生きる場で問題になるのが「存在両義性」である。この両者は、相手方を存在理由の基盤にしているという意味で特殊なのだ。子どもは、子ども状態を脱出したいというベクトルと子どものままであるろうとするベクトルを両義的に合わせもつ上に、前者の中には大人への「反発」と「同化」欲求という矛盾を孕んでいる。後者の中でも、庇護され続けようとする思いと大人の世界への反発とが混在している。養育者の側ではどうかというと、「子どもへの同一化と反同一化」「社会通念としての養育動向への同調と非同調」そして「自分の親への同一化と反同一化」という矛盾を養育行動のなかに両義性として抱き続けているのだ。養育行動が社会通念および文化的な価値観を映し出し、さらに子どもとの間で受容と反発



という両義性を孕みつつ、文化の世代間リサイクル（教育）が生まれるという論は、ランゲフェルトの教育論に通底すると思つた。ランゲフェルトは教育を子どもによる意味の再構成過程とみており、遊びは付与された社会的意味を子どもなりに理解しなおし自分のものとしていく行為ととらえる。鯨岡氏は、そこに「自分の親」との関係をより具体的なファクターとして絡み合わせ、そこから複数の両義性のしがらみのなかで展開される『人間Ⅱ育てる者』への発達論を予告している。次の著書が楽しみである。

第一章の最後に、関係発達の方法論として観察およびエピソードの記述の問題が取り上げられている。「関与しながらの参加観察」を、従来の発達心理学がとってきた客観的観察態度と「同時に」必要な方法とし、それを恣意的に主観的だとする批判にもちこたえるためには、「メタ」的な二重の行為を

重ねることが重要であるという。つまりかくのごとく見え、感じたと言語を観察・者をとらえた上で、それを「図」とさせている「地」の枠組みを見、感じる「メタ」的な態度である。さらに観察者を観察するスーパヴァイザーとしてのメタ観察者の必要性も示唆されている。記述方法も必然的に初次的なものから、一日の流れを客観的に羅列したもの、間主観的な印象を加味したもの、「素朴理論」を差し挟んだものへの「メタ」的な眼差しを重層化していくものとなる。この過程は、日常的な保育参加者が少しでも日常性を超越した視点を求めて、「想起」——「言語化（メモ、記録、話し合い）」——「解釈」などの一連の作業を日々の実践のあい間に差し挟んでいく営みとよく似ていると思う。<sup>11)</sup>

第二章「養育の場の両義性と原初的コミュニケーション」では、一歳から一歳半直前のY君とその母親の家庭でのやりとり（前著『原初的コミュニケーション』



シヨンの諸相」へミネルヴァ書房 一九九七）では、Y君の誕生から十一カ月過ぎまでの親子関係が取り上げられている）から十九のエピソードを抽出し、この時期になって一層すすんでくる親子の分かりあいについて読み解く。従来よくいわれてきた記号の伝達・交換という意味での「言語理解」の発達というレベルではなく、子どもの「思い」の明確化とそれに伴う力動感(vitality affects)の増大、そして養育者がむける「いつも、すでに」の関心の向け方などが、「子どもの言いたいことがわかりやすくなっ」てくることの背景にあると言う。しかしその裏側には、子どもの「主体としての輪廓の際立ち」があつて、養育者は単に「受け入れ、支え、認める働きかけでは不十分になって、そこに教え、導き、制止を加えることが必要になって」くるという矛盾的状况（「捻じれ」）を子どもも養育者も生きることになる。

第三章「保育の場の両義性と原初的コミュニケーション」では、保育園や幼稚園での観察をとおして、認め・支えることと教え・導くこととの間にあつる両義性、ひとりひとりを尊重することと集団性の確立の間にある両義性、子どもの自発的な遊びと保育者の「映し返し」、「気になる子ども」をめぐる保育者と子ども・他の子どもたちとの関係などについて論じられている。これらの問題は、現場の保育者が日々迷いつづけ問いつづけている両義性の代表格ばかりだ。たとえば二階のテラスからプラスチックの積木を落として遊ぶS君（障害のある子ども）の「いま、ここ」を大切にしたい保育者が、他の子どもに「どうしてS君だけいいの」と問いつめられて、「……そのうちみんなのように言葉が分かるようになったら、二階から投げなくなるよ」と苦しませるに説明していくと、子どもたちが結局「じゃあSちゃんは特別なんだ」と納得した、というエピソード

ドは考えさせられる。この記録を平面的に見ると教育的な間違いも矛盾もないと思う。しかし読んで感じるこのやりきれないようないろいろな思いの錯綜は、保育について一定の理解があり記録中の保育者に「成り込み」のできる人ならば実感するもので、これこそが保育者が日常的に住み込んでいる両義的なムードなのだと思う。保育実践中の「思い」が単義的にすっきりしていることなどほとんどないのではないか。「引き裂かれる」ような両義的な迷いが充滿している。かといってそれは必ずしも居心地の悪いものではない。むしろそれが保育者の心に漂う基本的なムードであって、鯨岡氏のいう「いつも、すでに」のメタ水準の関心の下地になっている。そして、そのムードを醸し出す端緒らしきものを分析していくと「両義性」ということなんだ、という説明に達するということかもしれない。このムードに疲れてしまうと、保育者は単義的になる。つまり迷

わなくなる。したがって、子どもの行為や表現に何が「映って」いるのかに関心が薄まる。子どもが見えなくなる。

第四章 「障害児の育つ場の両義性とコミュニケーション」では、まず、いまを受容することと発達促進的考え方との間の両義性が論じられている。これは「コミュニケーションの障害」が従来、機能不全ととらえられてきたのに対して、気持ちが通じ合えないという関係そのもの問題としてとらえようとする姿勢に通じている。コミュニケーションの難し





さを訴える障害児の親と子どもの問題は、子ども自身の障害それ自体よりも、その障害をめぐって親子がたどってきた歴史の上に現れる。「障害の受容」とは理念ではなく「能動的受容の形をとって現れ」「個人の価値観全体が大きく組み直される」ことによってしか生じないのであり、障害のある子どもをめぐって養育者としての両義的な迷いが「先鋭化」して現れると述べている。「通じ合う」とは何か、「迷い」とは何か、などの実存的な問いが先行することが肝要なのだろう。それを見過ごして、矛盾し合う両義的な二点を切り離して別々の実体として取り扱おうとすると、机上の空論になるのである。

この本全体を通じて「逆転の発想」のトレーニングを続けていたような印象もある。ある一つの事象を論ずるとその裏にあるのは何か、その対立する二項それぞれの中にもまた相矛盾する方向性が……という具合である。保育現象についていろいろと考

えをめぐらす際、問題の本質を明らかにするために「反対側に視点を映して意味をさぐる」という手法は、私自身も自然にとってきたと思う。保育という日常生活の事象の中に生きていけば、それこそグチャグチャなのだ。「保育にはまず混沌ありき」なのであって、それを一刀両断（二つに分けることだ）にしたい願望は常にもちながら、いやそれでは保育の本質を記述できないというジレンマをもっている。

だからこの著書に出会って、この混沌に真正面から向かい合う勇氣と執拗さが感じられて、嬉しかった。（が、やはり現象学なのか、という当然のような物足りないような両義的な気分もある。）ブーバーの「（対応語は）それをはなれて外にある何かを言い表すのではなく、……語られることによつて、存在の存立がひき起こされる」（『我と汝』岩波文庫一九七九、P. 7）と言うのをヒントにする

と、相互補填しあう両義的な概念があつてはじめて

存在を全体的に浮かび上がらせることができるという  
ことであろう。

気になったのは「弱み」という言葉だ。他者存在  
を前提として根源的な欲求充足を調整しなければな  
らないことを、著者はなぜ人間存在の本質的な「弱  
み」と表現するのだろうか。「弱み」でもあるし  
「強み」でもあるという、当然起こるべき逆転の発  
想がこの一点に関して見られず、しかもこの「弱  
み」主張は氏の著書のみならずシンポジウム発言な  
どでも散見される。私などは「混沌相乱れて」とい  
う保育状況に身を置き、秩序ある世界への憧憬を半  
ば抱きつつも、そのグチャグチャにまみれている快  
感の方へ傾斜しているので、自己へと収斂するタガ  
が多少緩んでいるぐあい「ほどよい」と感じるの  
だが、おそらく心理学における「自己・自我」概念  
とは、私の知識や理解力を大きく越えて、不可欠の  
理論的メルクマールであるのに違いない。でなけれ

ば、ご本人がシンポジウムで発言していらしたよう  
に「人間観」の問題なのだろうか。<sup>(2)</sup>

(十文字学園女子短期大学)

#### 注

(1) 拙論「保育実践研究における省察的理解の過程」津守

真・本田和子・松井とし・浜口順子『人間現象として  
の保育研究 増補版』光生館 一九九九年

(2) 日本保育学会第五十二回大会「連続講座Ⅰ実践と研究

Ⅰ ビデオを通してみる実践研究の課題」における自  
由討論の中の発言。(一九九九年五月三十日)